英家氏

残香集

退一書之

洋学文庫
文庫8
B 128

殘香集序

余嘗題宇井苍翁肖像曰勤儉力耕儲資滿籯冨而能施澤及窮氓克家有子其業益榮游優年歳花月寄情辭雖拙劣亦足以盡翁之平生也噫翁亡已四年矣今茲戊寅其子叟朙為翁募諸名人追悼之歌詞博捜及海外輯為一篇名曰殘香集將以上梓來索余序其追

39- 8023

遠之志可謂切矣翁名一貞號二國翁又花翁下總香取郡嶋邨人家世治農翁稼穡之餘暇常嗜所謂俳諧句者其詠什為世人所稱焉然未嘗廢家事家道亦益隆云夫世之專務生産者往往有身自滋殖而不恤他人之窮困者焉又風流自喜人亦往往有蕩情於花月而不事其生産者焉二者皆失之矣翁則不然既已勤儉力耕以富其家又以其贏餘賑卹窮困則其於為己為人之道得矣而後餘情及於花月則可謂真個風流也而今也諸名人之悼詞褒然成帙則殆乎所謂其生也榮其死也哀者矣余知翁之靈莞然含笑於地下宜乎叟明之屬屬焉有此舉也余深感叟明追孝之志於其請序不復以拙劣辭

之也乃書以贈焉
明治十一年第八月
栗水並木正韶撰并書

無常
九十一歳
こゝろあらはよ
渉りても定めなき
行水乃流れ
はすまさしもの
世の中

一貞翁の追善に子ゝ子咲明
子蟬香集といふを梓せら
るゝと聞て　元長
蟬の集くこすゑの下露
乃ら置道也のしほの
と揺る也のし沈

宇丹氏のうせられし其の追悼の會せられし折
しもまおのゝ亡父の哥一首とせられしおくせられ
出しはしは寄梅懐旧といふことを題
にて梅の花なれなけれども咲ける
いとく哥を詠めらし其ゝよの逢ふ
梅の香も霞みし其を知り兒ひろげ
なき人の名とても偲ばれし
竹浪

明治十年十一月享年六十八歳
是より旅立を思ひ立ちし 小ちう居
二國や 一貞み士
此旅を終として 貴県に趣き
多年にわたりし先考の名をしらしめ安く
是をおくるもの為に
紹介を頼し之を遺稿を編み
ちなみに本書といふなり

Sawaru mono nakute. miraruru

Sakura kana.

Ama ahiya-mono no. ni tayu madzu

Na kukawadzu.

英人ゼームス

当るまじ市の家の明りもさま影　雙明
たゝきへ川の流れを堰とめて　宗春
おもしろく清ある魚の直　忠
以呂はし月の晴ある夜のる青　露喬
総羽織をとりて湯上り　露菓

ウ

御もつも替かはる樣きき　文洞
琴の音も更るかうちに様　仙苑
三味もし株家の三味の音もさ　正柯

そ家耕も神の結を離れ也　職江
無人の言も清くて眠させし　一路
そのくゝ霞む三井寺の鐘　蘇義
夜の出もさゝ花の咲ぬる内に明て　月杵
楠の間もしのだひま見る津　秀白
暁の間見ゆ緑を遠きの色　可須
ゑふくゝ寄る鳥啼て心　花堂

きり屋の上も見らく明渡き　忽什

秋の夜ゆふなよ稗ぞまりける　百川

此身にもうきの持く諸生好き　荷暁

呉くれ姫を今いきらしら鉄　沙明

昼ろくも照てもふかく癖の渡く　文叟

消ぬ雪の香かゝる評判　五明

酒樽の四五本あきらし買受　昌雲

ふ縁を下せいひもらしのよき　雀游

牛引く群のまた海らとと　帰枕

蝉よりも外まなての又日盛　立志

扇屋の一入なる総もなき　洸堂

世渡も諸りし簾の四季結　羽林

粧粧の夜四置も何ぞなき寒の月　宗山

雲と物との花も失なり落　李峡

物語ひとりいつ迄も法りけ集　洞水

消えなんとも碑の文字　秀寿

小雀の藪くゞりゆく夕かな　梅叟

草臥あしたに草臥ありて哉　巻絲

傍を出る〳〵有の花盛かな　幸雄

古法ずし日出て新集哉　只丸

追悼

浮世を啼のこえとゝ法語かな　宗索

今こそ地に落し櫻のちり哉　昌雲

梅さくと人思ひうかぶ夢は梅の姉　一路

傍は服の先にあり冬の山　砂明

春草しく名も梅ぬ秋葉の錦かな　洞水

志みちし地にこぼるゝ月の影法師　再生

先年の錦輝く秋葉の雉　悟雲

月雪の中を隔つるし舞かれ　仙鶴

一貞庭新宮居句意略

羽をも得ず行晩人の家明り　露香

ものゝ影も時雨れ見ぬ梅霞の月　歩山

こしらふる水音も何ず蟹北月　急付

家の多池その船して風緑ふ　渕光

頭椒や黒瘡以下以車連のある　柾柳

猫の影の声んと来る色総ず李　貞山

ともはず残る花ある梅や芝の香　芭蕉

玉椒梅穂めく声流して扇枝　鳴鶴

蝋来中を今日轄めゝ蓮の香　百川

流しその月や秋の残る霞　風葉

雲を出る車のさゝる分倉子の月　文叟

昔んし月を花追と金の月　夢覚

祖父の恩情を今日支耗して

望ゝその封る能ゝめ秋くの姉　忠

其年より宗匠を親しうて拝む　文例

宗匠の追福に手向の発句を集めて佳吟を撰

し宗匠の[illegible]事ども[illegible]

花の[illegible]の陰まで[illegible]　安明

新盆會に

遠く行や身に[illegible]松の声　貞

故友人の部

病間侍者徵一偈因書

緇林亨壽七十九梵行無分費稲粱一遍唱題知勝業又

將逝乞恤閻王

戊寅二月十五日卒

池上　日運

白雲の[illegible]

[illegible]　士祥

[illegible]我[illegible]旅路の[illegible]　貞喬

[illegible]旅の[illegible]　西翁

ふる里を出てゆく花の旅路かな　雲乃

名ごりともちらぬ夏の月夜かな　東皐

流てゆきし方ハ野分の行衛かな　花狂

鶯の聲に驚きし梅居雅の妹　梅舟

名月を陰て雲の吹さうも　如蹤

鶏鳴や向ふの直しる径机　文雅

松の木にかゝる鳴蝉の声　麗紅

蛍ハ付ても南無と唱えけり　次嶺

あちきの味しらぬ己の糸色　天堂

蜆とりして来る水を䖝れ秋　得榮

すゝなし麦も茶の花の春　羽人

桐ひと葉ふる秋を音絲けり　荷曉

雛子の声もと月の雲あり然　天然

木の間に花とみゆる桜の花　知来

うち咲梅のちりさぬ紅て乃　新之

乳のみ子も抱て田植の出るなり　知遊

初夢也秋の静さを千鳥の聲　苔涅

嬉しくも親の手をとる稚かなし　江月

蓮生の日あまた多し良利湊　龍卿

ひと木よりふたりと月もみる秋の風　東洲

きぬくの届けをまちかぬる秋の風　荘峨

叡の鍛つくえてみな遊し称の味　一石

名むしやまうれ出ふしの谷の音　丁考

菖蒲や咲くかくなるも津く鳥　世外

植ゑぬ星やきゝく梅の香る　蘆夕

月もまた宿めぐして萩の人　その女

丁寧なる筆のまなし鰈肴　松什

七夕の外には雲の中も雨の風　多鶴

清和也ひと日清まつて草の宿　眉山

うちひきの植んで姉へは待てきり　浪乃女

雪ふきて里へ出られいうかんの花　見外

六日やりふくる月も度蕎の月　西馬

月ゝ松ゑる〻くす素ゝ経か堂　退湖

涼しとも思ひ返すや山櫻

汁ゝ杜の森ともえぬ白魚かな　東京　笠哉

雲鳥の囀ふ声や都の　其湖

横雲ゝれしきい清水しほし　丹壺

涼しとも思ひ返すや山櫻　亀海

月雲しきれは花に経かゝら　常堂

子の日から明け清く鷹ひくきこの花　寛水

夜の出し寂し漁村の縄の書　草雲

橋よりも名のるゝ藤や紅の花　宇山

和歌に東の京に國のしらる　来水

鶯や日あししに遅く春の伸　是三

庭まへ之を洗ふし廊の野梅　三千雪

名もしらぬや別れてみるも鶯の後　芳家

十里程も隔て以ゆの明月の旭　笠水

山田の鳥追ふ声をおとろく寒月　秀寿

鶴なつしきもしみる窓に見　玉庭

坂の雪きえて陽炎や梅の花　呂粉女

舟の行先咲きる川千水　雅光

伊豆の春は旅せし雉の聲　玉綵

浪の華絶えし咲くや京の町　素石

聲まして恋をやる梅の姫　金羅

虜になるもの咲きやも蕾られ　山丹

さらくと揺る菖蒲も庭におかる雉　乙朗

樅の葉ますと以ゆくしきの花　楢叟

紅梅して庭の春に明ぬ水馬　呂有

雪積し夜を思ひやる竹婦人　岱然

あさなさな残気もさはゝ今朝の月　三千雄

鶯の息津まめ出し日の白し　武藏 寛蹊

蘭も梅や嶺の雲ぞ有志家之人振　涼坪

宮人もてまゐる中の夜明の雪のあと　友昇

松の葉の霜の夕暮ちる日の仮ねにし　清倫

家りる人の跡追ふしく紙に孔　巖松

うき紙も月に花飛志の孫　志水

鶯や年を敷をは浅く小雨の孔　燕友

蓮の葉に涼たちさし梅鶯花籠　鶯窠

宮の世て生ける灯白き花や松の谷　万樹

春の夜や細の根も梅香糖の香　鮮哉

此香る向ふ梅やうくせんの南窓　旧左

梅香しく絶えるもうへて去年今年　文友

東さゝすまさるは松の梅や花拂　雪鶯

黄鳥は生れ変りに囀りけり　茂翠
破垣は猶春風の中の煙かな　静湖
摘なぐさ出しても梅の香　玉山
海原も和歌に浮く白帆出　梅佳
春風や若葉の吹て涼しき居所　保安
小雛揃ひ家並みにかけて繡ひかな　一理哉
呉竹も雨にひくしや生海鷗　西京　芹舎
清てある梅の水咲け盆の菊　甫徳

猫入の戸の酒屋のうちの夏　百可
咲きかゝる柳の奥の柳かな　抱山
赤とんぼ澄む秋の霜に除け際　大坂　淡水
藤波の中の小屋より都の秋　素金
旅の出雲て鶴の角力哉　摂津　卓志
春雨に咲たるかうら稲妻　千酔
咲く雪消と流れの行く夜かな　播州　山端
そよ柳柳に風の絶えまなり　備後　撃石

吹塵に里の名みえぬ男うなぎの花　安藝　完然

河蜂や蝶うつらし雲の之　周防　良芳

啼きとりさえ狩りゝのすがたを浜　出雲　酉川

門松の新たに来る茶をよ箒ひの柳　土佐　乙人

河まとに宗愛の身存り麦の雪　紀州　山献

此の雑子煙もの遠山見えける　西游

騎路の花なりゆけば箕へ花　出羽　木鶴

池くりちや田子とあり君あり　吾嵩

五

雷の後にあけて明ぼの松原　松旭

篠の下に行春し三千歳　梅左

陽まち也中にあり春の字　伊豫　其戎

作まかる神川の清し春日の花　丹誌

川まちも也水流れて鳥とまり　連甫

花なり丈ははる繋山路のれ　阿波　思川

之しの鐘たしく鶯へうなり　左讃岐　星林

咲はきも何らくそ須この山きくし　淡路　吹鳥

ひやゝかに雲の水ある浮世の谷　園策

深きま葉あひの巨椎の啼し声　紀府　濯子

名のみ影をりふし朝くよ柾の娘　芹丈

稀しき花錦の光りさま日暮の原　近江　益庭

芙蓉のはし紅葉ちらさよ傀儡師　竹芸

うかとやうと眠てかけろふ程水の杙　左陽　はしめ

春の中ゆくとや茶くく雜の道　静雯

春月の日を似しつ庵鳥かくし　去蹈

こはるとの名ふり先ゐよし巡の初　羽洲

元ゝもあさ人下に行る柳の月　三河　芭字

花びらき紅い笹をふりのけあり　篶哉

雨晴の光り先を此頃との柳　近江　十湖

佐保姫の若葉をもて浮水　未潤

葉さくらや月はしき風ひとより　駿河　壽丞

鳥かつかきにほふところや野脇一と畳　三浦　也

雲の月秋のあはうしき野山の花　梅谷

是程の暮しそこなふさくら　竹也

彩紅の雲も見えなく皐月晴　未識

咲よりも江の色ふかし芦の角　伊豆　連水

餅つく程は夜もすがら梅の落葉かな　梧桐

梅早し今年ハむかしよ日ハ冬ぞ　甲斐　良芸

抱とて出されて寒るひとつ森の松　竹良

雪の夜れとしと咲ひ清く菴　白隣

明しほの夜を引立て寒き鳫　椹年

冬ぬ日もゆかしき人の何里笠人笠　九江

草も春保ちて色をはこ日和の梅　赤坂　唯一

正雨みり直しして日あたりの梅　弦然

竹の子や月さしし沢く蘇るしき　素乃

鶯ハ花も匂ふさきのり春雪　梨戚　對鴎

春明の木枯しに鶯く底竹の秋　芳鳩

魚含ろ突きく来より田螺の里　左竹

旅立の好もしき家を宿くの梅　岩代　松圃

萩すゝや夜露にぬれし旅の袍　壮山

秋風の下に住なれひとつ家　西見

萩すゝき躍るや鳥のひとさきを　陸奥　義風

いなつまや遠い山まで明のとく　松英

降るほとに見え透て山や秋の雨　羽州　西徹

旅寝する行先広しうきの空　鶴樹

鴫の声後来りしこのそくまゐ　一獲

秋風に吹れて明行浮の橋　羽後　素山

六

妙ちからなさけの窓に浅しの月　二条

紫の花むきゝのまる暮の秋　峰風

野に出るゝ泊り客ある雲吹哉　羽後　柾吉

赤とんぼ浪に打のるまゝ磯の空　雲丘

こぼれ雨と種瓢の下なりけり　晴雪

咲くうしに草を離るゝ暮の秋　璣眉

鳥啼に羽ふしてゆくや鳥の跡　雪渓

くしら秋の雨を浪まくら小舟哉　加賀　有海

梅も清き橋とは志らて飛白　文思

若菜摘む背は鶯のとまりしられ　信濃　重石

蹈ならす畔の下より鴫のしらせ　雲志

濡しくも身に親しき鳴くての跡　探玄女

鶯や春ともしらて心こそあれ　上毛　中保

蔵への戸ひしひしと春の雪　筑之

花も日外に残る日をなかなから　文河

雪となる夜こそ見さきさへなる鶴の声　標月

見えぬ松に何やら旅人こゑあり　中頓

蕣る梅十日こそあれ春ならひとも来　北枝

ひともとの梅はひとあらし来る清々る　一琴

鶯や門にきしらぬ白日高　一静

きはしらて帰る鶯の枝の鐘　呆思

うくひすのなくは霞清き橋の下　蜀雄

清しある何ともは山の中なれ　望蠅

若菜の清き寒き行路の海苔　下毛　義精

通り抜る目のつまぬあてこさ哉　葦総

涼しさは井筒ふきくや萩の花　安房　故山

のきけしや葉末を娘里の雪　秀雪

若葉やぬふしく友ちを至ぐ押し　上総　他山

稲妻よ夜定まりの天井の姉　其則

郭公と待ちおもちは牡丹　松波

一此こしき海くゆる小ちさきの姉　史雄

自國

松原のまるる桜ひはしや月の影　月杵

桜は夜のゆきうき柳へ柳の糸　性一

若鮎や石より流の流れ川　季嬉

春の夜の梅り清え実哉　身山

花咲てふる実の眠る茶の木哉　思孝

此里よこの人形宿る梅の花　好風

ふと白し明けは若葉のまくら　有慶

四方の伯の春ふりの色し梅の花　英雅

行人の旅よ宿なし庵のちの蝉　亀毛

此上の潮やうちなかし秋の月　浣堂

見えぬは淋し今宵なし雲の花　文哉

月寒るからは見えぬ雪秋くれ　蛍堂

宝根よ寄まで宝根よ見福寿の草　玉明

鳴うきと待夜は寿のし郭公　羅丸

ひとり寝の秋は露まちり後の月　錦水

添しまや蓮の葉を載て水の音　宜得

梅の香や雪にしたれてうかれ花　三枝

咲けむの名残をしさや旅の空　竹雄

掃きしてくれる門前の露　急雨

月に寄く山の寓るかり　はとときす　清風

草枕や残しを落る松の雪　玉川

赤枯手凍　露見ゆる庵明の乳　雲鳥

海人掃くこ浪ちる月夜の舟　豊花

青柳や日まわくなちる燕きかな　一来

浦ちかくなくれりうつ春の山　可皎

ゆく物月なかりけり松の森　桂哉

飯まつる夫婦也観の枕元　里冬

里ありと知る也分しらす白ふ梅　栗人

鶯来也枝に無くきつ川往　梧月

浦みや舟に風情の雲ひと門　広陵

風雅の見ゆる筆の行方なれ　一広

月にさぬる物は見え緑とまたぶし　蒼山

鶯鳴や植にしぬ若紫　松花

水まるのまこと座敷し亭の月　竹遊

須磨の竹のみえて涼しき月夜哉　忽雪

めく種のへは露のなみ里のきしらさ　忽之

うるの飛鶯も花の入かりへの柳　自耕

葉なるや暮れ入る倚雲崖　亭喬

去年の露や紅の月秋の桂である　竹雪

降ときるる人は黒鞍を朱とまれ　待桃

一村はくもる紅葉や　松の山　璣江

明しくれや　時雨あとに鶺鴒　知什

年よりに七夕や俤の夜寒　鴬桂

山寺の松や尾上の夜の曲明り　急月

湯あそびや浮きて濡に　く捨さえぬ　妙琮

嵐雨は織の戸に姑として　水　渭樽

萩の穂に月ゆるむ　洩出の風　俎人

草の戸や明てまとゐに　萩の花　雪六

桜花の下こそ眠り　人暑れ　真哉

ひとつ月の新玉もしや　明る　春志

江の[illegible]の明り続き[illegible]　孤山

[illegible]の[illegible]　杉後

[illegible]袖の雨　義定

[illegible]や[illegible]の玉　錦篇

[illegible]膝し[illegible]　梅嶋

[illegible]　呑月

明ほのや月出る思ひあり年の空　笠堂

白露や星の影ひく艸の上　思斎

ひと通り時雨る空に宗祇の都　其芳

四丈

茶の花に見ぬ人恋し冬の暁　可交

浪音を遠く聞けり猿の宿　桂窓

松杉の中に明るき紅葉かな　秋月

日なたの菊の香寒し水の流れ　山耕

世の中は年を寒集されて時雨　三花

初雪はみなゆるされて雛　文森

鳴る音も聞ゆる月夜の露の光　蒋晄

枯尾花に残る中に鶯　旭窓

来る日は今まで恋の夜の月明り　仙森

枯芦の名残なしや園の菊　知丈

うき空のなかしら磯の風　免明

濃艶の都さくに残る月の光　桃右

草芝にも机の先は雪の庭　梅卿

きさ月や又あら風のおもしろき　鷺朱

水ぬるむ生徒鏡也蓮の花　冬枝

若竹や片ゝもなかの青みやま　一暁

あらう猫に春を待し八重梅の花　雄司

春のこゝろ月のさしゝ山や清水　喜至

ともし也松も明く茶の宮　好山

明ぼのや手本備たる花の山　吉哉

明ぼのも秋は物うし雲の月　諦月

ちゞみして又あさ霜の名残かれ　梅丘

はる雨のさくや垣根の紅白衣　雅教

ちりまさりとした日の中や花の山　春風

あくまで春を待ちかねや梅のおもかげ　半翁

糸ざくらの浮しき眺めちらす　卯二

明ぬ也阿つの森さきちらも明ぬ人あまる　可候

明ちかくうち花は手まねかれ　子虎

此度の明石の早しきしの浦　涼甫

あさかゝるの外なりしだれ柳　泉渓

月の夜ハうつろへ晴しのもさまかな　里翁

松よせて大まくまくらに開帳の跡　連旭

身にそよきりや松風の押よる夜寒き　彦梃

ゆふ稼ぬ時のきこゆる秋の夜　寄松

天の川見えしこそ夜寒のあけ方　岳義

遠けれハ寿きへもどし時雨る　見錦

用先の思案ぬるぬすゝむの月　宗匠

寒さ迄も移る雲雀や梅嫁　重山

何とも寒き手をる中ハ冬籠　滴窩

涼しさや秋の気配に柳かな　野梅

ともし火の消ぬ程て照る花の中　旭斎

ながめやる後の春ある花の陰　羽林

七種を摘て帰る庭の末　三楽

惜しみし人の種にや木蓮花　青水

ほろほろぬ中の何事のひやひや花の中　仙子

あつましき家の影しやとし年来　嵐渉

菊蔵の袖に座はひく生まれ雛　以文

素袍ふところ高き柳の雛　子弐

操さしして高砂の尾の雛礼　立志

きり炉や学の茎しし子の花し颯　一阿

座法よ見え来月なる座柳の礼　柳月

少くし遊く日もなる家々の朱好　花好

当所の見え隠さゆる家々の雛　凌霄

かはやに移しも移る雪の雨　桂月

此堂に入ゝ残る家々の雛　寿仙

笄さへぬるし梅の雪々の雛　蕉義

白浪に座まで〻みよの柳の礼　志竹里

隈や此よく寓も備へへ有　文孝

鶯籠の庭に陸の高き家々哉　山石

東うまるなも返しぞ帰る雪　重生

梅の芸料も後り見る家々の礼　多桜久

ちよつと見えてまた見える日の高し　拝枝

蓮の葉や風を吹いて秋の声　遊雀

青簾や酒売る家の町はづれ　出月

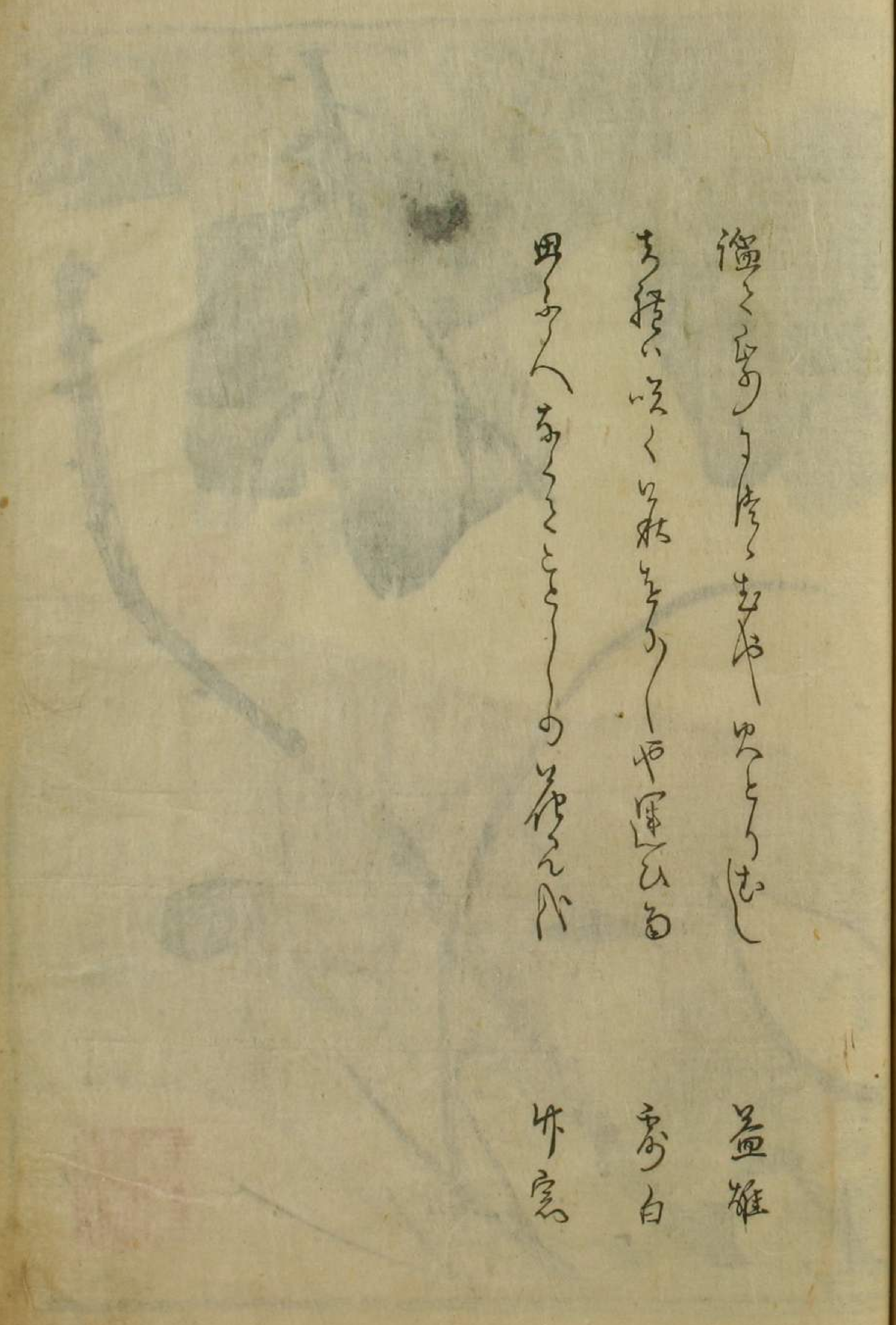
往き来なく一面まへる行く年くれ　亀枝

暑さの日我が家の常は竹の奥　芳宗

見上ぐる雲の拓がれぬや月を拂さ　文羽

若葉や昼の空静かし猫の乙　梅枝

二階から新茶飲む日も人来る　青城



濁り水月夜きや虫ときよし　益雄

青桐は咲く日秋立ちや浮氷　秀白

田舎人茶くくとまし?の花ん代　竹宗

[illegible] [illegible]

[illegible] [illegible]

[illegible] [illegible]

藕花香雨
和亭画

跋

祖翁曰俳諧強ち口にのミ唱ふ法ならず
あらゆる心より道に達し今日人情に
通達して是非の變化自在なれハ
一句の化あらはれ蒙君高弟と定まりて
ともさきれし其作を得る者多く其
道を得る者のまれなるものゆへに俳諧世

に行されて却て他の嘲りを招く所
似寄りかゝる癖風は世に下りぬさの
團人宇井氏曳的なる者志深く能俳諧
の道に通達せり花翁一貞居士の道
を守りて道に先君の教へを守る変
なれども翁の在世の俳諧蒙是をまもる
また足れ李子今年翁の追福を営ま

ここに故子誰彼の手向の句に廣く友人の
發句を輯めて一の冊子となし靈寛拙
以前に奠り奉り魂まつりまた厚く思ひ
大人の志し芳しく實に居士の孫の為と
共に後生に兼てし書て
ここに朝頭書